

2025年度 サンマ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し、国立研究開発法人 水産研究・教育機構
 水産資源研究所がとりまとめた結果 －

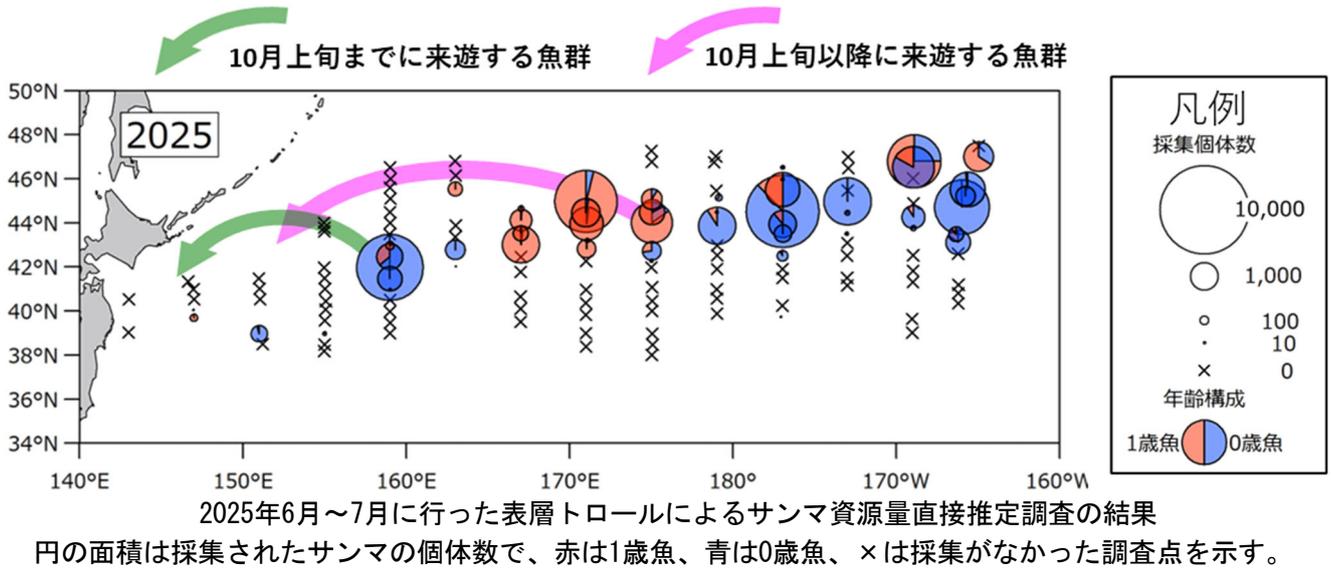
今後の見通し（2025年8月～12月）のポイント

漁況

- ・ 来遊量は昨年並みの低水準となる。漁期の前半は昨年を下回り、後半は上回る。
- ・ 漁獲物に占める1歳魚の割合は昨年並みとなるが、1歳魚の体重は昨年を上回る。
- ・ 8月から9月にかけての漁場は公海を中心に形成される。

海況（8月～9月上旬）

- ・ 近海の黒潮続流の北限はやや北偏～かなり北偏で推移する。
- ・ 親潮第1分枝の南限は平年並み～やや北偏で推移し、三陸近海に冷水域が形成される。
- ・ 親潮第2分枝の南限はやや北偏～極めて北偏で推移する。



問い合わせ先

漁況について

国立研究開発法人水産研究・教育機構
 担当：広域性資源部（横浜、八戸） 南川、富士、巢山、宮本
 TEL: 045-788-7615 FAX: 045-788-5001（横浜）
 TEL: 0178-33-3411 FAX: 0178-34-1357（八戸）

当資料のホームページ掲載先URL

https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/forecast/files/sanma20250729.pdf

海況に関する資料の掲載先URL

国立研究開発法人 水産研究・教育機構プレスリリース「2025年度 第3回 東北海区海況予報」
https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/fri_20250729_tohoku-3rd.html

今後の見通し（2025年 8月～12月）の概要

対象海域：北西太平洋（道東海域～常磐海域）（図1）

対象漁業：サンマ棒受網（8月～12月）

- (1) 来遊量：昨年並みの低水準となる。漁期の前半は昨年を下回り、後半は上回る。
- (2) 魚体：漁獲物に占める1歳魚の割合は昨年並みとなるが、1歳魚の体重は昨年を上回り110g台～120g台が中心となる。1歳魚の体重は漁期の前半は120g台～140g台が主体、後半は110g台～120g台が主体となる。注)
- (3) 漁期・漁場：8月から9月にかけては北海道～ウルップ島の東方沖の東経150度～東経165度の公海を中心に魚群が来遊する。10月にはある程度まとまった魚群が北方四島周辺海域およびそれらに隣接する公海に来遊する。

注) 1歳魚とは、例年8月以降の漁期中までに体長29cm以上になると予測されるもの。ただし、近年はサイズの年変動が大きい。

今後の見通しについての説明

今年の調査について

国立研究開発法人 水産研究・教育機構（以下、水産研究・教育機構）では水産庁の委託を受け、2003年から毎年6月～7月に日本近海～西経165度に分布するサンマの分布量を推定するため、表層トロール網を用いたサンマ資源量直接推定調査を行っている。この結果を用いて、調査線ごとのサンマ平均密度を調査海域面積で引き延ばすことにより海区（1区：日本近海～東経165度、2区：東経165度～経度180度、3区：経度180度～西経165度）ごとに分布量を推定している。今年の調査は水産研究・教育機構の調査船（北光丸）および北海道教育庁渡島教育局の実習船（北鳳丸）の2隻によって、東経143度～西経165度の調査海域において実施した。本予報では、サンマ資源量直接推定調査のほか、（地独）青森県産業技術センター水産総合研究所（以下、青森水総研）開運丸が流し網を用いて行ったアカイカ資源調査の結果も参考とした。

今年の調査結果

計136調査点（昨年137調査点）で行った表層トロール網曳網試験（以下、トロール調査）で採集されたサンマは、51,608個体（昨年40,044個体）であった。サンマは東経147度～西経165度に連続的に分布した

が、昨年に比べ1区の採集量が大きく落ち込んだ一方で2区の東経171度付近を中心にまとまって採集されたのが特徴であった(図2)。サンマの採集された海域の表面水温は8.2℃～17.6℃であった。8月以降の漁期中に主な漁獲対象となる1歳魚(例年漁期中までに体長29cm以上になると予測されるもの)の多くは、2区と3区において昨年と同じく水温13℃未満の海域で採集されたが、1区においては主に13℃以上の海域に分布した(図2)。

調査を行った海域のうち、おおむね経度180度以西(1区と2区)の魚群は8月以降に西向きの回遊を開始し、日本漁船の漁場に達して漁獲の対象になると考えられている。今年のサンマ資源量直接推定調査から推定した1区と2区の分布量の合計値は109.9万トンとなった。これは、調査範囲が極端に狭く比較可能な分布量を推定できなかった2020年を除いて、2003年以降22年のうち下から6番目に低い値であった(図3)。昨年(92.2万トン)と比較すると、わずかに上回ったものの同水準であった。ただし、そのうちに占める1区の分布量の割合が昨年(52.8%)から大きく減少し、14.6%となった。なお、3区に分布するサンマは例年主に0歳魚であり、調査年には日本近海には来遊しないが、一部が翌年1歳魚として漁獲の対象に加入すると考えられている。

例年、トロール調査で採集されるサンマの体長組成には2つのモード(峰)がみられ、体長27cm付近を境界にしてそれより小さいグループ(主として0歳魚で構成)と大きいグループ(主として1歳魚で構成)に分けられる。今年のトロール調査結果をもとに推定した1区と2区に分布するサンマの体長組成をみると、例年通り27cm付近を境に2つのモードが確認された(図4)。しかし、近年は1歳魚の小型化が顕著となり昨年は27cmを指標として年齢分解することが困難となっていたため、今年は1区と2区で採集された264個体(肉体長19.1cm～32.7cm)について船上で耳石を摘出し、年輪の有無を観察して年齢査定を行った。得られた結果を用いて50%の個体が1歳魚となる体長を統計的に推定したところ、26.7cmと推定された。この結果を用いて1区と2区の体長組成を年齢分解したところ、今年は例年通り体長27cmより小さいモードが0歳魚、大きいモードが1歳魚に対応していたことが確認された(図4)。過去の結果も同様に耳石の年輪の有無に基づいて年齢分解し、今年の結果と比較したところ、今年の1歳魚の体長モードは昨年より1cm大きく、例年並みであることが分かった。

今年のトロール調査結果をもとに推定した1区と2区に分布するサンマの体重組成は10g台と90g台にモードがみられ、上記の手法で年齢分解したところ、それぞれ0歳魚と1歳魚に対応していた(図5)。2019年

以降1区と2区で採集された1歳魚の体重は減少傾向にあり、漁期中の漁獲物体重の減少につながっている。今年の1歳魚は90g台～100g台が主体であり、昨年の1歳魚(70g台～80g台主体)より体重が重かったが、2019年以降の低水準は脱しなかった(図5)。1歳魚の体重組成は海域によって異なっており、1区では100g台～120g台を主体に2019年以降はあまり見られなかった130g台以上も混じったのに対し、2区では90g台～100g台が主体で130g台以上の割合は非常に低かった(図6)。推定分布個体数のうちの1歳魚の割合は1区では8.8%であったのに対し、2区では83.5%であった。1区と2区を合わせた1歳魚の割合は59.6%と推定され、昨年(58.8%)とほぼ同じであった。

トロール調査ではサンマだけではなく、マイワシ、さば類(マサバとゴマサバ)などの他の浮魚類も採集される(図7)。今年は、マイワシが49,564個体(昨年218,498個体)採集されたほか、さば類は81,047個体(昨年76,372個体)採集された。マイワシの採集個体数は昨年に比べて大幅に減少(昨年比22.7%)したのが特徴であった。

このほか、青森水総研が、6月～7月に東経144度～東経151度、北緯36度30分～北緯41度に配置した8調査点で流し網を用いたアカイカ資源調査を行った。そのうち3調査点(東経144度～東経151度、表面水温19.9℃～20.2℃)で合計8個体のサンマが採集された。以上の結果は、日本近海にもサンマが分布するがその量は極めて少ない、というサンマ資源量直接推定調査の結果を支持するものであった。

今後の見通しについて

(1) 来遊量

今年の調査結果では、8月以降の漁期中に漁獲対象となる1区と2区の合計推定分布量は昨年をわずかに上回った(図3)。ただし、昨年は日本に近い1区が分布の中心であったのに対して今年はいずれも沖合の2区が分布の中心であった。このことは、今年の主な魚群の日本近海漁場への来遊が昨年に比べて1～2か月遅れるため、その間の逸散・死亡などにより日本への来遊量が減少することを示唆している。したがって、昨年に比べてわずかに上回った推定分布量から来遊量の増加をそのまま見込むことは難しい。以上より、漁期を通じた漁場への来遊量は昨年並みの低水準になると判断される。推定分布量は1区で昨年を下回り、2区では昨年を上回ったことから、漁期前半(10月上旬ごろまで)の来遊量は昨年を下回る一方で、後半は昨年を上回ると予想される。

(2) 魚体

今年の調査結果では、1区と2区の推定分布個体数における1歳魚の割合は昨年と同水準であったことから、今漁期を通じた漁獲物における1歳魚の割合は、昨年(87.7%)並みと考えられ、1歳魚が主体になると予想される。1区は1歳魚の割合が低かったことから(図6)、漁期の前半は0歳魚がある程度混じると予想される一方で、2区は1歳魚の割合が高かったことから、来遊量が上向く漁期の後半は1歳魚の割合が増えると予想される。なお漁期の終盤は、例年通り0歳魚がある程度混じると予想される。

1区と2区で採集された個体のうち、1歳魚の体重は昨年を上回り90g台～100g台が主体であった(図5)。調査時点から漁期までに体重が平均で20g程度増加することから、漁期を通じた1歳魚の体重は昨年(80g台～100g台)を上回り110g台～120g台が主体となる。また、調査中に1区に分布していた100g台～120g台を主体とした1歳魚が漁期の前半に、2区に分布した90g台～100g台主体の1歳魚が漁期の後半に漁獲対象になると考えられる。それぞれ20gの体重増加を見込めば、1歳魚の主体は漁期前半に120g台～140g台(近年としては比較的体重が大きい)となるが、後半は110g台～120g台(近年の平均的水準)になると予測される。

(3) 漁期・漁場

2019年以降、サンマの日本近海漁場への来遊が遅れるケースが見られるようになり、その原因として、1歳魚の体重の減少による西方回遊開始の遅れが指摘されている(Kakehi et al. 2022)。過去の1歳魚の体重と西方回遊開始日の関係より、今年も1歳魚の体重が軽いため例年(2018年以前)より20日程度西方回遊開始が遅れると推定された。この結果をもとにした回遊モデル(Kakehi et al. 2022)では、8月中旬時点ではほとんどの魚群が日本からはるか遠く離れた海域に分布するものの、調査時に1区の比較的水温の高い海域にいた魚群が北方四島東方沖公海(東経160度～東経165度)に回遊すると推定された(図8)。そして9月中旬には、依然大半の魚群は東経160度以東に留まり日本近海まで到達しないと見込まれるものの、小規模な魚群が北方四島～ウルップ島の東方沖の東経150度～東経156度にかけて来遊すると推定された(図8)。

調査時に2区にまとまって分布していた魚群は10月以降に日本に比較的近い海域に来遊すると予想される。日本近海来遊後のサンマの南下ルートは親潮に沿って形成される。親潮が道東沿岸を中心に張り出す年は魚群も道東沿岸に来遊するが、沖合を中心に張り出す年には魚群も沖合を中心に来遊する(図9)。今年6月における親潮本流の流路は、千島列島沿いに道東海域付近まで明瞭に形成されていた

が、道東沿岸から襟裳岬の南には発達せず、釧路沖と三陸近海の暖水塊の東側に沿って昨年とほぼ同程度まで南に到達していた(図10)。また、2025年度第3回東北海区海況予報では、9月上旬には親潮は道東沿岸に貫入せず、釧路沖に位置する暖水塊の東側に沿って南下して親潮第1分枝を形成し、その南限は平年並み～やや北偏で推移すると予想されている。10月以降も親潮の状況が大きく変わらないと仮定した場合、10月以降サンマは道東沿岸に来遊しづらく、暖水塊の東側に沿って来遊しやすい状況になると予想される。このほか、マイワシ資源が多い年代はサンマの漁場が沖合に形成される傾向が知られている。調査海域におけるマイワシとサンマの分布はせめぎあう関係にあり(図7)、近年のマイワシの低温域への分布拡大が、サンマの分布に影響した可能性が指摘されている(Fuji et al. 2023)。今年のトロール調査ではマイワシの採集個体数が昨年に比べて大幅に減少していたことから、昨年までに比べてサンマが日本近海に来遊しやすくなる可能性も考えられるが、親潮が沿岸に発達しない状況では道東沿岸へのサンマの大規模な来遊は見込めないと考えられる。以上より、10月以降の魚群の主体は親潮の流路に沿って北方四島周辺海域から釧路沖暖水塊東側の公海へと来遊すると予想される。

海況予報の根拠となるFRA-ROMS IIによる予測は2か月が限界であり、特に10月以降の海況について現状では定量的に予測する手段がない。そのため、漁期中盤以降の漁況予測については、9月から始まる「サンマ中短期予報」において、従来の予測モデルに加え、海洋観測結果や直前のFRA-ROMS IIの予測結果に基づいて行った回遊モデルの更新結果を考慮して情報の提供を行う。

(掲載場所は <https://www.jafic.or.jp/information/category/gyokyo/>)

文献

- Takehi, S., Hashimoto, M., Naya, M., Ito, S., Miyamoto, H. & Suyama, S. (2022) Reduced body weight of Pacific saury (*Cololabis saira*) causes delayed initiation of spawning migration. *Fisheries Oceanography*, **31**, 319–332.
- Kuroda, H., Suyama, S., Miyamoto, H., Setou, T. & Nakanowatari, T. (2021) Interdecadal variability of the Western Subarctic Gyre in the North Pacific Ocean. *Deep Sea Research Part I: Oceanographic Research Papers*, **169**, 103461.
- Fuji, T., Nakayama, S., Hashimoto, M., Miyamoto, H., Kamimura, Y., Furuichi, S., Oshima, K. & Suyama, S. (2023) Biological interactions potentially alter the large-scale distribution pattern of the small pelagic fish, Pacific saury *Cololabis saira*. *Marine Ecology Progress Series*, **704**, 99–117.

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	
岩手県水産技術センター	
宮城県水産技術総合センター	
福島県水産海洋研究センター	
茨城県水産試験場	
千葉県水産総合研究センター	
和歌山県水産試験場	
一般社団法人 漁業情報サービスセンター	
国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産技術研究所	

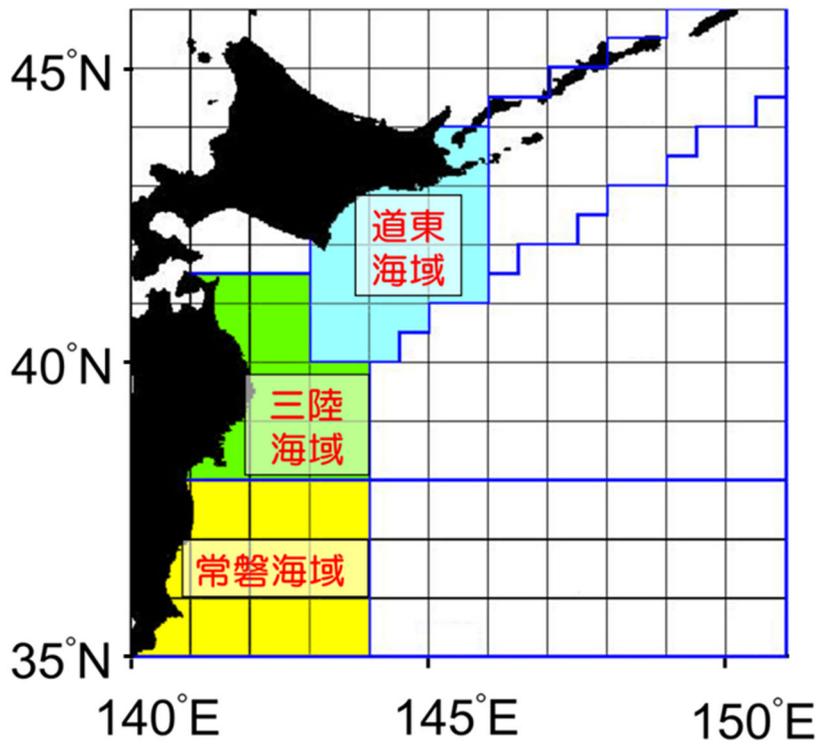


図1. 本予報における海域区分。

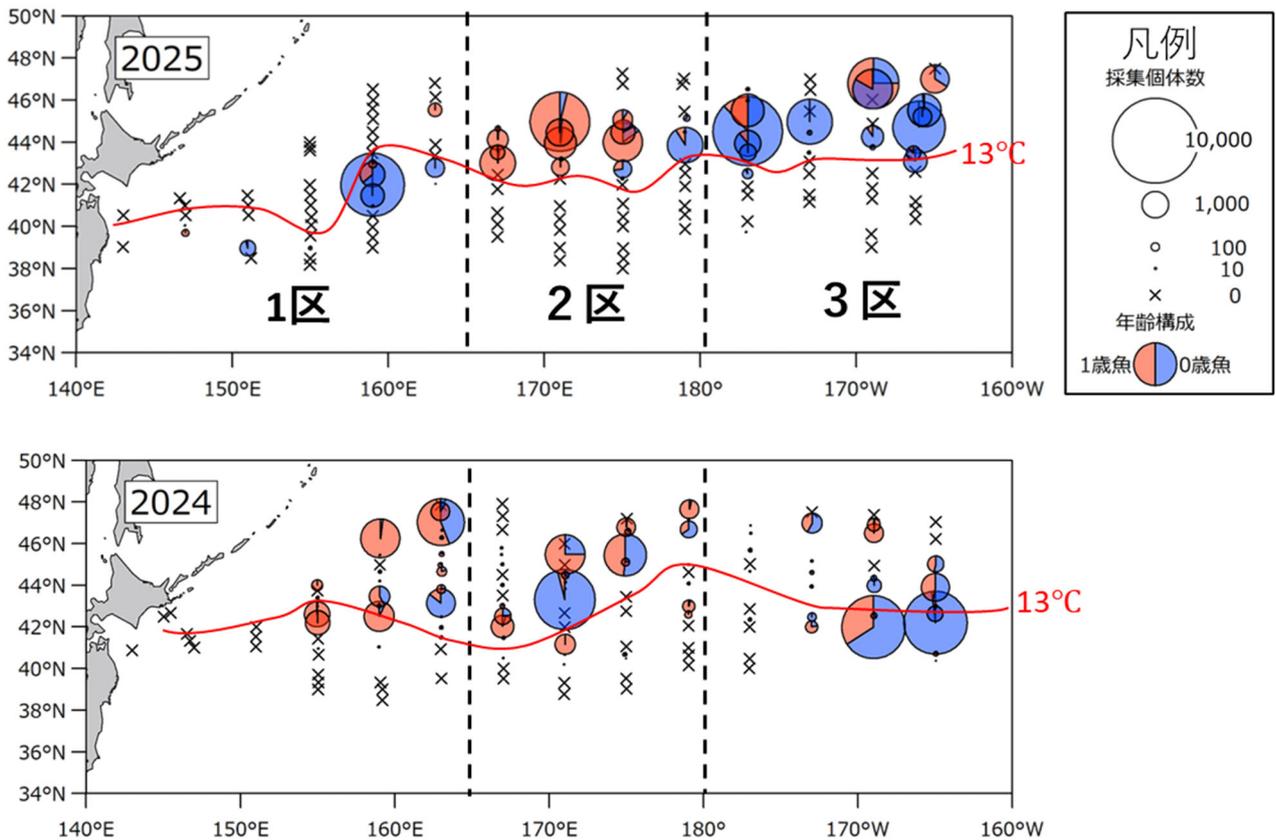


図2. 2025年および2024年におけるサンマ資源量直接推定調査の調査範囲と採集個体数。分布量の推定は、調査範囲を1区（東経165度以西）、2区（東経165度～180度）および3区（180度以東）の3海区に分けて行っている。

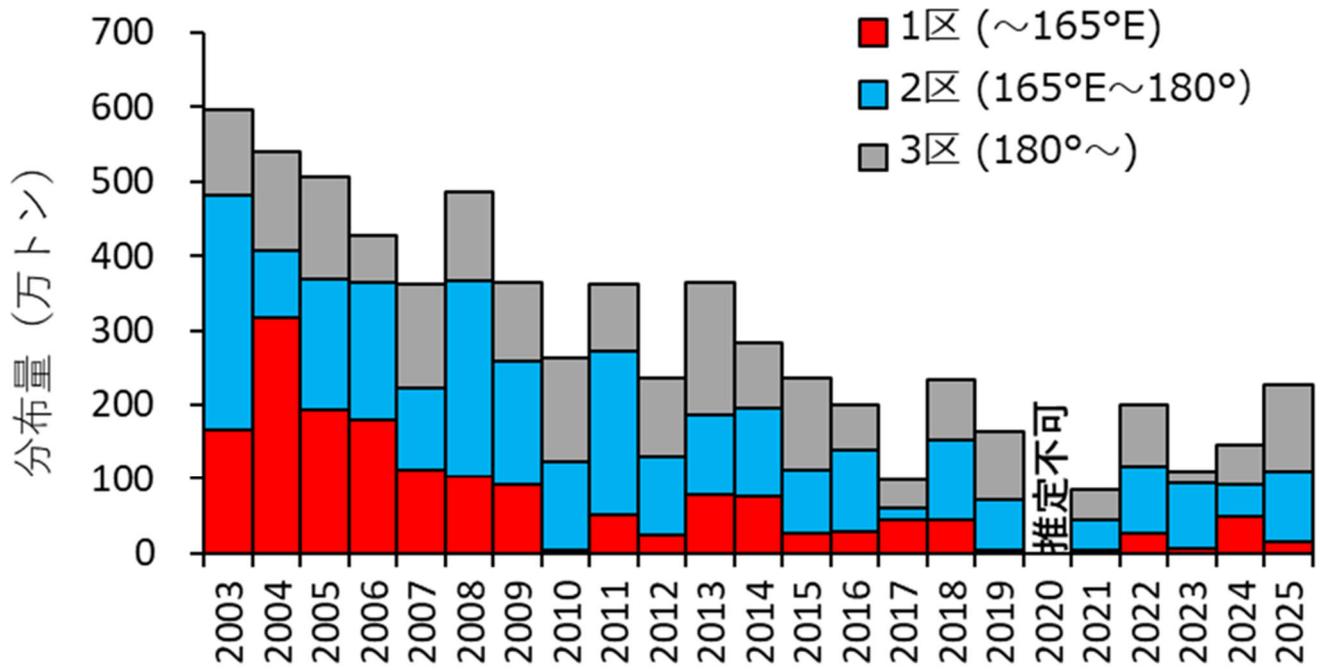


図3. サンマ資源量直接推定調査で推定された2003年～2025年の海区別サンマ分布量。2020年は調査範囲が極端に狭かったため、比較可能な指標が推定できなかった。

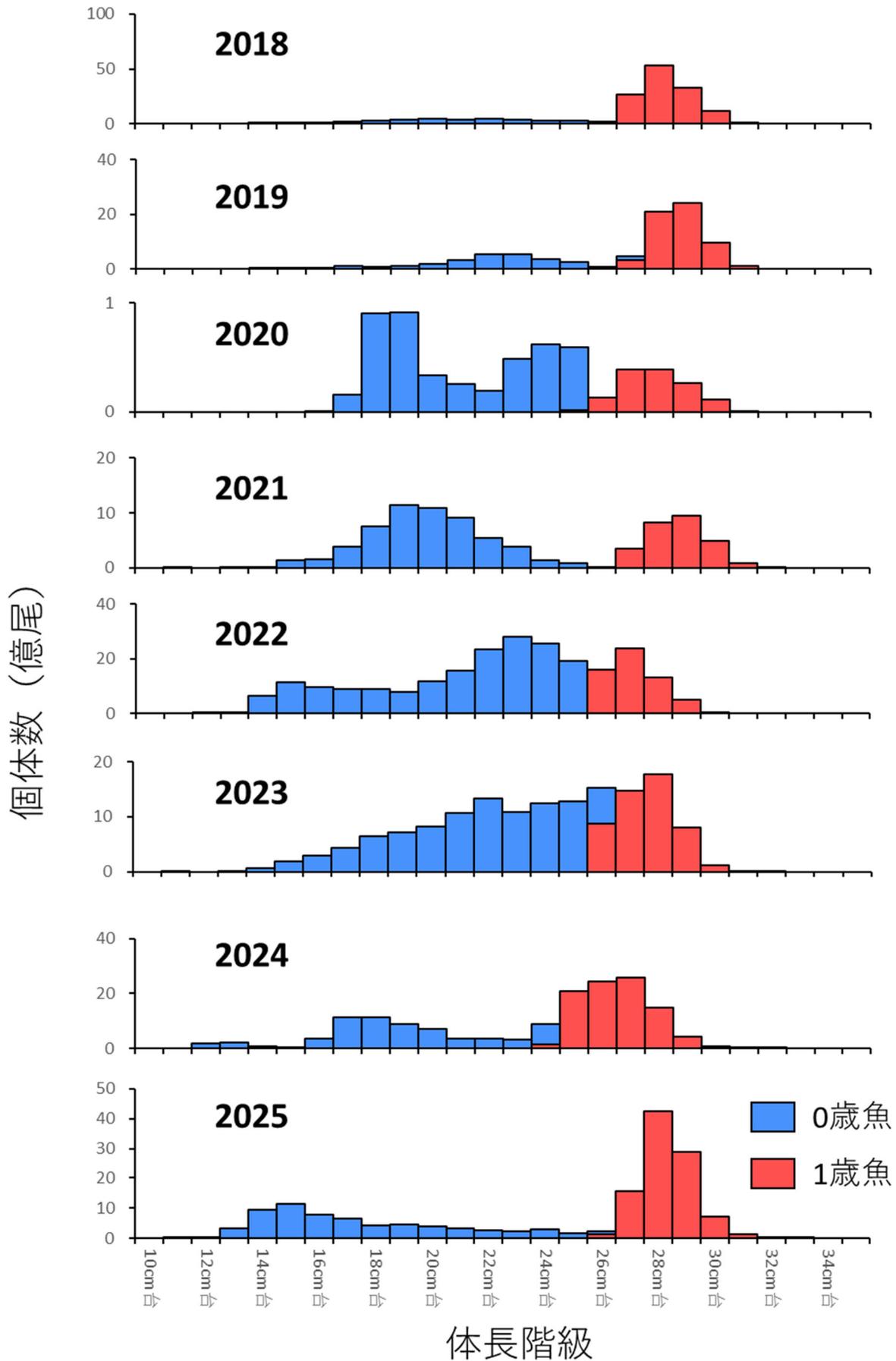


図4. サンマ資源量直接推定調査結果をもとに推定された1区と2区（180度以西）に分布していたサンマの体長組成の経年変化。

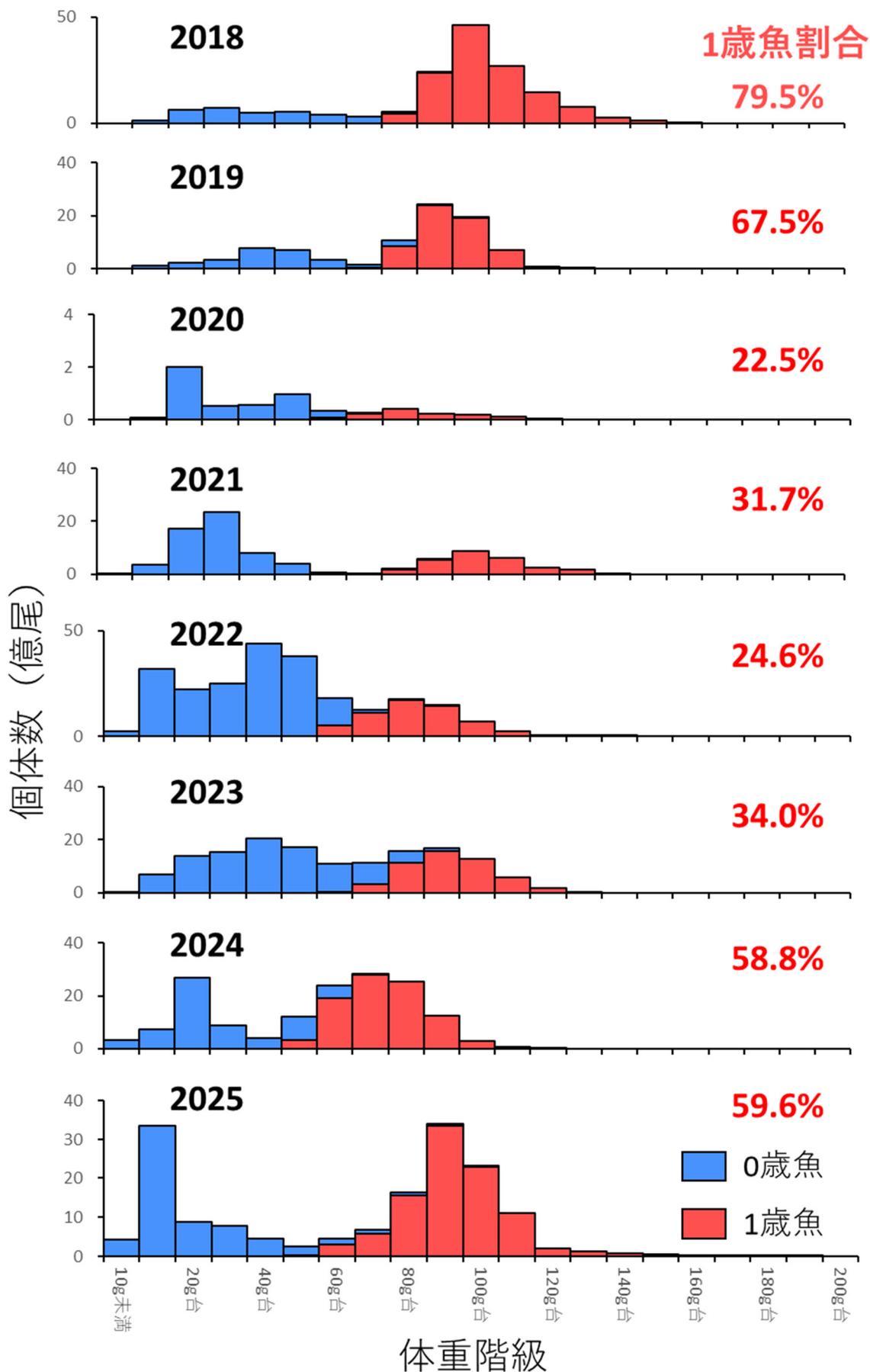


図5. サンマ資源量直接推定調査結果をもとに推定された1区と2区(180度以西)に分布していたサンマの体重組成の経年変化。年別の推定分布個体数のうちの1歳魚の割合を赤字で示した。

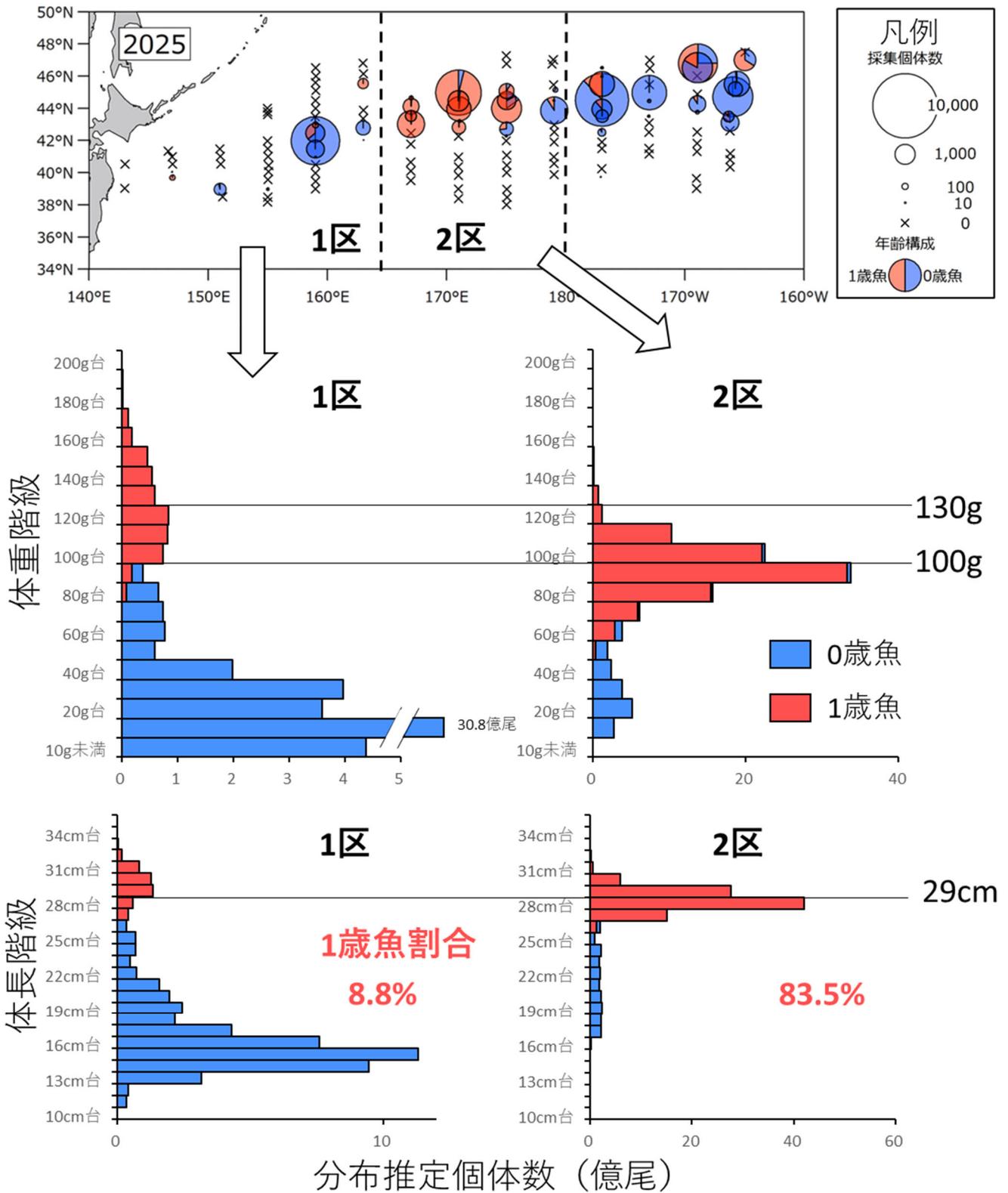


図6. サンマ資源量直接推定調査結果をもとに推定された1区と2区(180度以西)に分布していたサンマの海区別体重・体長組成。

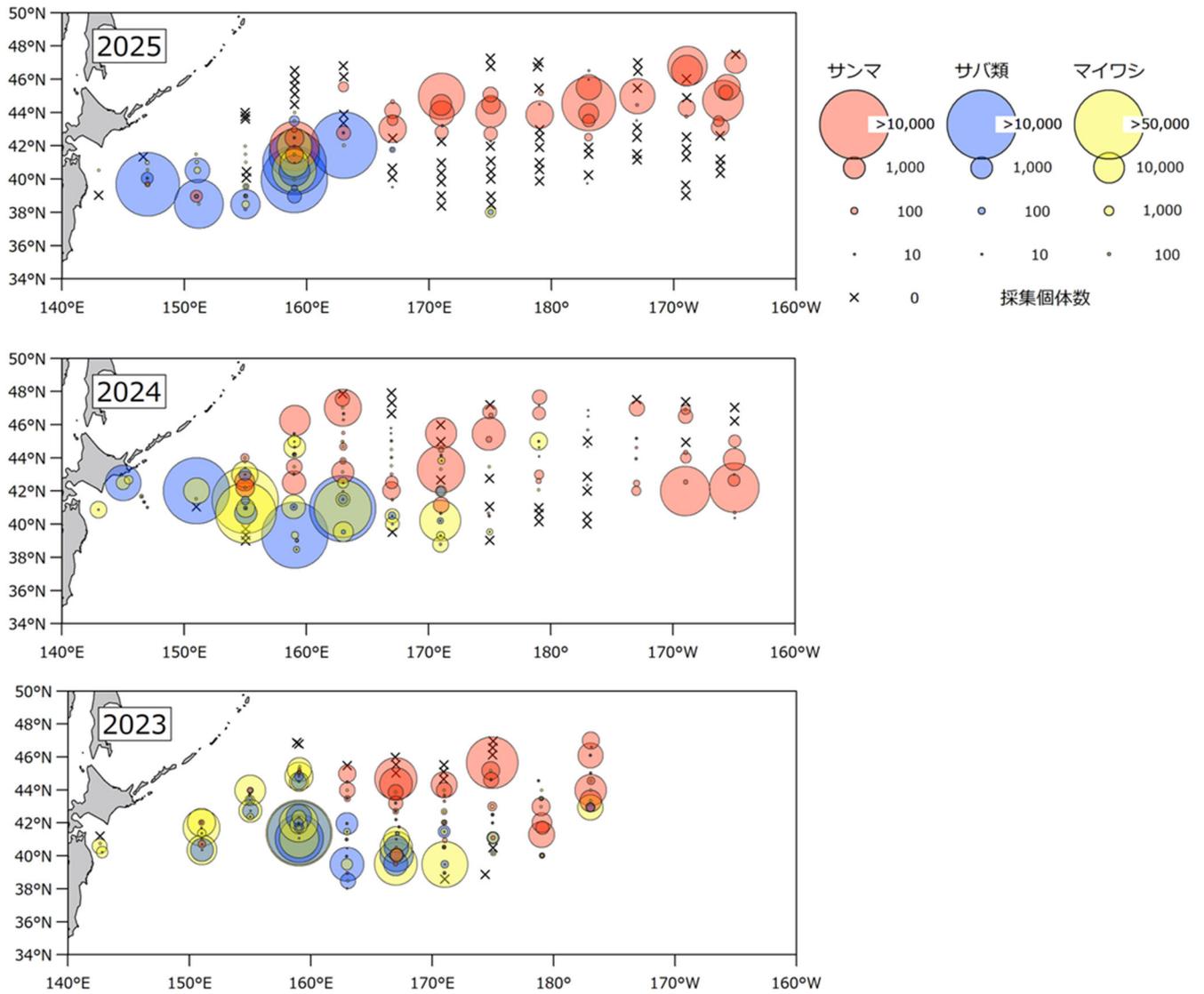


図7. サンマ資源量直接推定調査で採集されたサンマ（赤）、さば類（マサバおよびゴマサバ；青）およびマイワシ（黄）の採集個体数。3種とも採集されなかった調査点は×で示した。

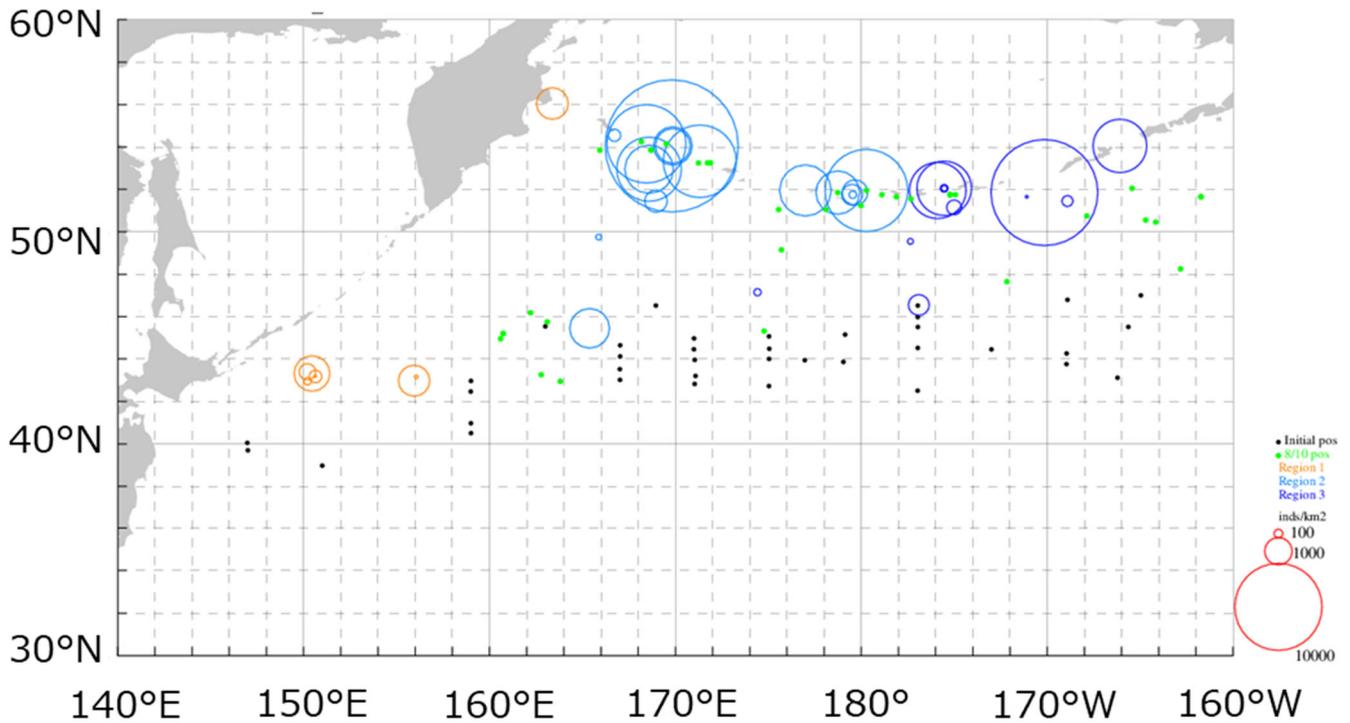


図 8. FRA-ROMSIIによる水温予測とサンマの回遊特性を組み合わせた回遊モデルによる来遊予測。6月～7月に行われたサンマ資源量直接推定調査で採集されたサンマが9月13日までに到達する海域を回遊モデルで推定した。モデルは、サンマは8月17日まで等温線の北上とともに北に回遊し、その後は(0.75m/s【2.5BL/s, BL=体長】)で10日ごとに約0.3°Cずつ高水温帯を指向しつつ西側に回遊するように設定した。緑の点は8月10日の、オレンジ・水色・青色の丸は9月13日の予測位置を示す。回遊の始点の経度区分を色で示した(オレンジ:1区(東経165度以西)、水色:2区(東経165度～180度)、青色:3区(180度以东))。詳しくはKakehi et al. (2022)参照。推定された調査時から9月13日までの魚群の移動の様子をアニメーションで表示した結果はhttps://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/forecast/sanma_animation.htmlを参照。

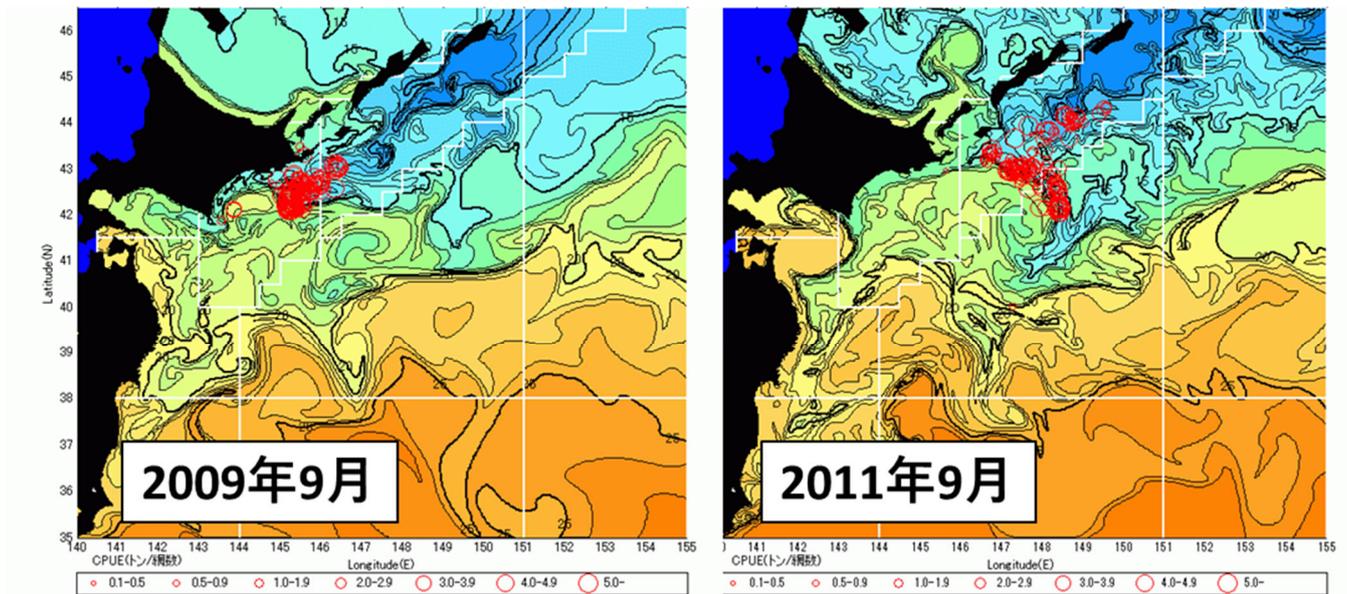
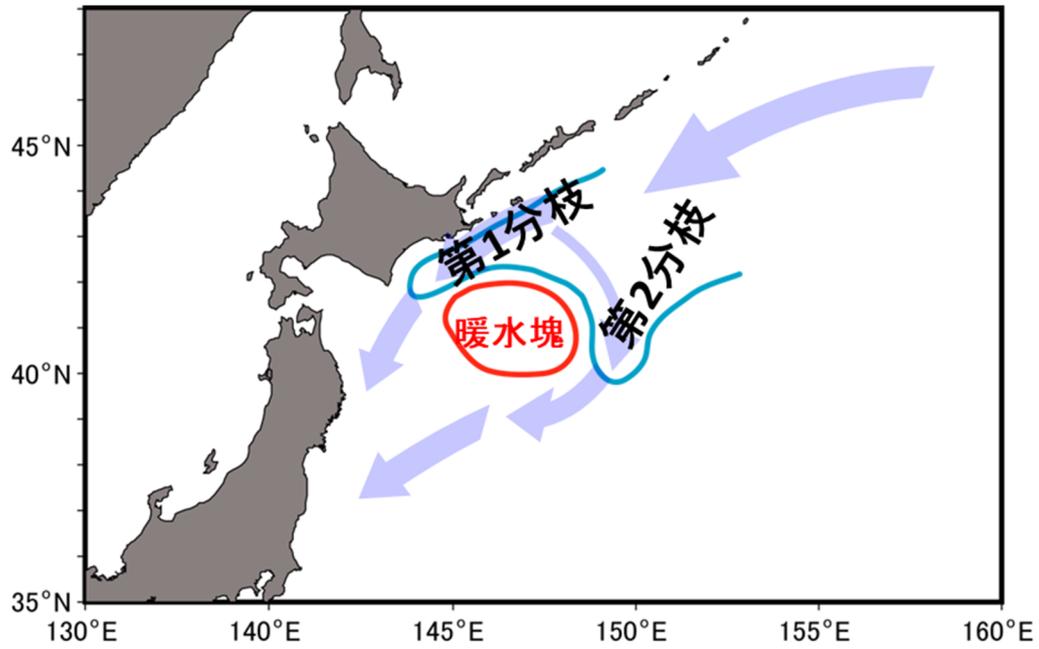


図9. 海洋環境とサンマの漁場の関係。親潮に沿って南下してきたサンマは暖水塊の縁に沿って本州東方沖に達する。その後道東沿岸に伸びた親潮に沿って魚群が道東沿岸に達するが（2009年の例）、暖水塊が道東沿岸に接すると親潮が沿岸に貫入せず、沖合に発達した親潮に沿って南下する。

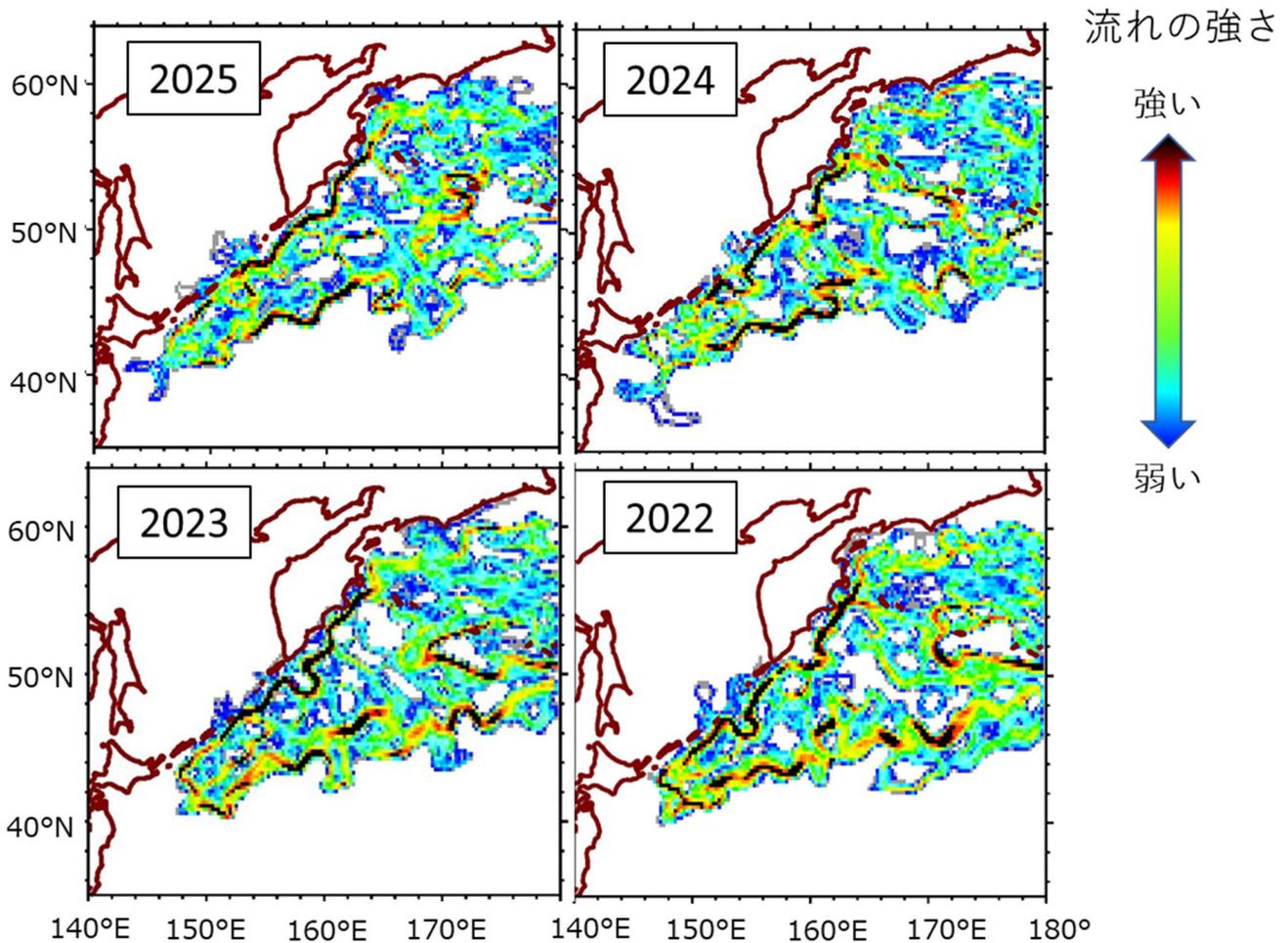


図 10. 人工衛星による海面高度データに基づいた 6 月の西部亜寒帯循環の流路の推移。西部亜寒帯循環は北西太平洋亜寒帯全域の海流の循環であるが、親潮はその南西端にあたる。人工衛星の海面高度計によって得られるデータから、この海流の強さと流路を推定することができる。図の黒い線は流れの強い本流を表しているが、2000 年代からの西部亜寒帯循環の弱まりに伴い、近年はこの本流が日本近海に達しなくなる傾向がみられる。2022 年と 2023 年は千島列島沿いに南西に流れた親潮の本流が道東近海に達することなく南東に反転し、北緯 40 度付近まで達した。一方、2024 年は釧路沖や北緯 39 度付近まで親潮が広がっていた。2025 年は、昨年を引き続きの親潮の南方への張り出しは北緯 39 度付近まで及ぶが、西方への張り出しは釧路沖と三陸近海の暖水塊の影響で根室付近に留まる。分析方法は、Kuroda et al. (2021) 参照。

補足資料1

サンマの生態、漁業と資源の状況

[サンマの生態]

サンマは日本の近海だけでなく、北太平洋の中緯度域(亜寒帯～亜熱帯海域)に広く分布している。寿命は2年で0歳と1歳の2年級で構成され、1歳魚(例年漁期中の体長は29cm以上)が漁獲の主体となっていたが、2019年以降はその体長・体重がそれ以前に比べて小さい傾向が続いている。サンマは分布域を季節的に南北に回遊するほか、東西方向にも大きく移動する(補足図1-1)。6月～7月には主に東経155度よりも東側(沖側)に分布しているが、8月以降になると日本漁船の漁場となっている日本近海まで来遊してくる。漁場は8月に千島列島～道東海域で形成された後、日本列島東岸を南に移動し、10月には三陸海域に、11月中旬～12月には常磐海域にまで達する(補足図1-2)。サンマは親潮と呼ばれる冷水の南側への張り出しに沿って南下する。親潮は日本近海で道東沿岸と道東沖合のそれぞれで南に張り出す二股構造をとるのが典型的なパターンである。道東沿岸に親潮が発達する年は漁場が日本列島の沿岸に形成されるが、親潮が道東沖合を中心に発達する年には沖合に漁場が形成され、EEZ外の公海まで広がることもある。1980年代前半には漁場が沖合の親潮沿いに形成された年が続いた時期があったが、その後2009年までは主に道東沿岸に漁場が形成されてきた。しかし、2010年以降再び沖合の親潮に沿って漁場が形成されるようになった。これらの年による漁場の変化は、親潮の発達の度合いや道東沖における暖水塊の存在などの海洋環境の他、サンマが6月～7月に分布する海域やその分布量、さらにはマイワシなど他の魚種の分布状況によっても影響されると考えられている。

[サンマ漁業の状況]

日本のサンマ漁獲量の95%以上は、大臣許可漁業である北太平洋さんま漁業のもとで棒受網によって漁獲されている。

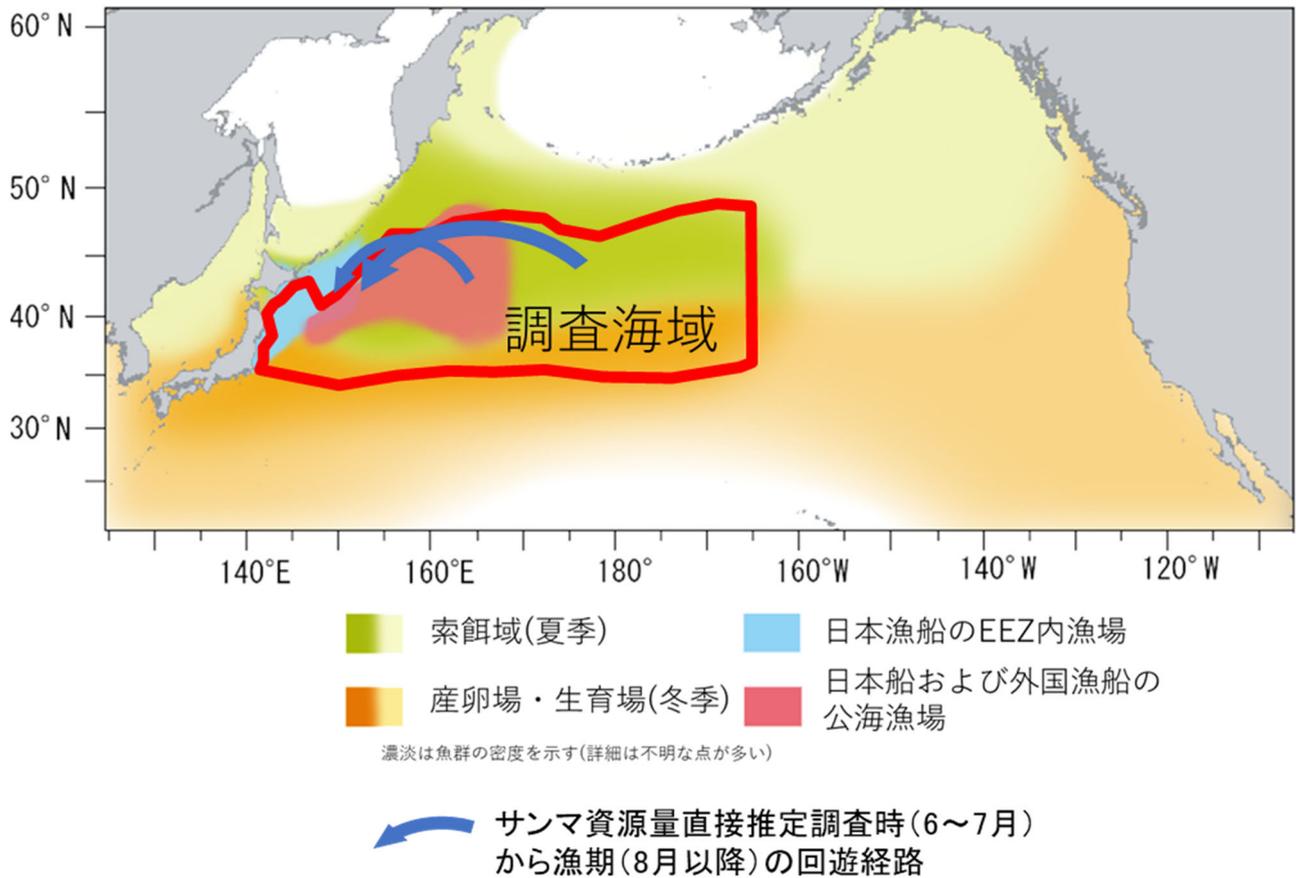
日本のサンマ棒受網漁業は1950年代に急速に発展し、漁獲量が急増した。その後、1970年代は漁獲量の変動が大きい期間があったが、1980年代後半以降はおおむね20万トン～30万トンの範囲で比較的安定して推移してきた。しかし、2010年以降は減少傾向となり、2022年の漁獲量(1.8万トン)は、棒受網漁業が普及した1960年代以降では、もっとも低い値となった(補足表1-1、補足図1-3)。2024年はやや漁獲

量が回復し、3.9万トンとなった。2024年現在では、日本のほか、ロシア、台湾、韓国、中国、バヌアツがサンマを漁獲し、このうち台湾、中国、韓国およびバヌアツは公海のみで操業を行っている。台湾は2000年代に漁獲量を伸ばし、2013年以降は日本の漁獲量を上回っている(補足表1-1)。また、中国は2012年、バヌアツは2013年にサンマ漁業に本格参入した。2000年以前は日本の漁獲量が全漁業国・地域の漁獲量のおおむね8割以上を占めていたが、日本以外による漁獲量の増加に伴って、日本の漁獲量が占める割合は徐々に低下し、2024年は25.2%となった(補足表1-1、補足図1-3)。

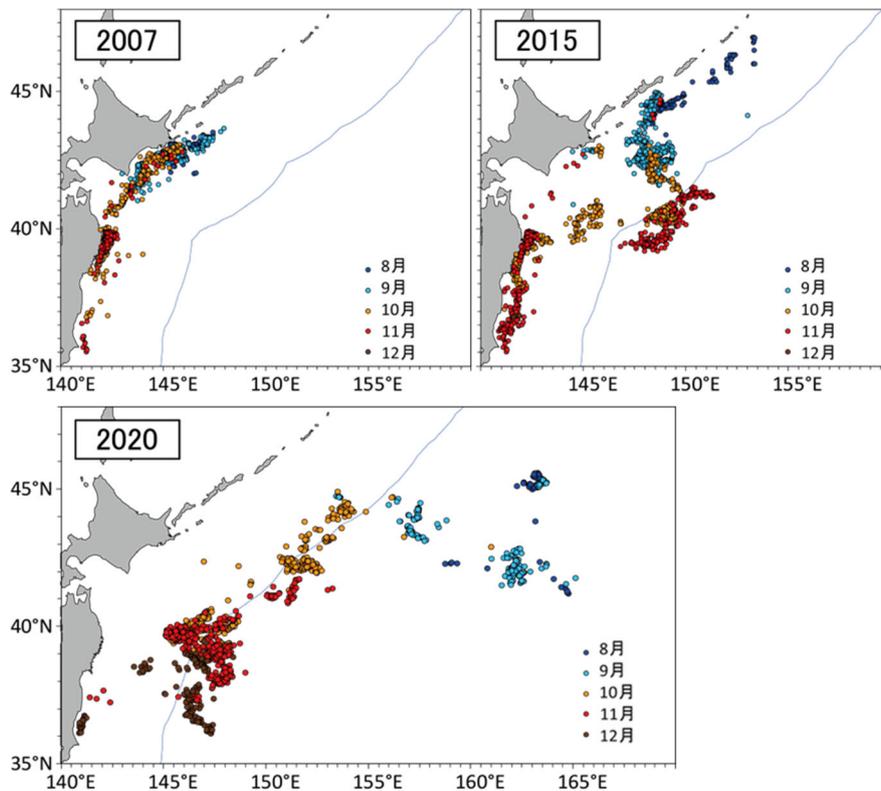
[分布量の推移と資源の状況]

1区と2区の推定分布量は調査開始時の2003年には482.1万トンであったが、変動を繰り返しながら減少しており、2021年の調査結果では45.3万トンに減少し、過去最低となった。2025年は109.9万トンと依然低水準を維持している。特に1区における推定分布量が2010年に大きく減少し、その後回復していない。なお、3区に分布するサンマは例年主に0歳魚であり、調査年には日本近海には来遊しないが、一部が翌年1歳魚として漁獲の対象に加入すると考えられている。3区の推定分布量は十分調査できなかった年を除いて37.8万トン～178.9万トンと変動幅は大きいものの、明確な減少傾向は見られていない(補足図1-4, 補足表1-2)。

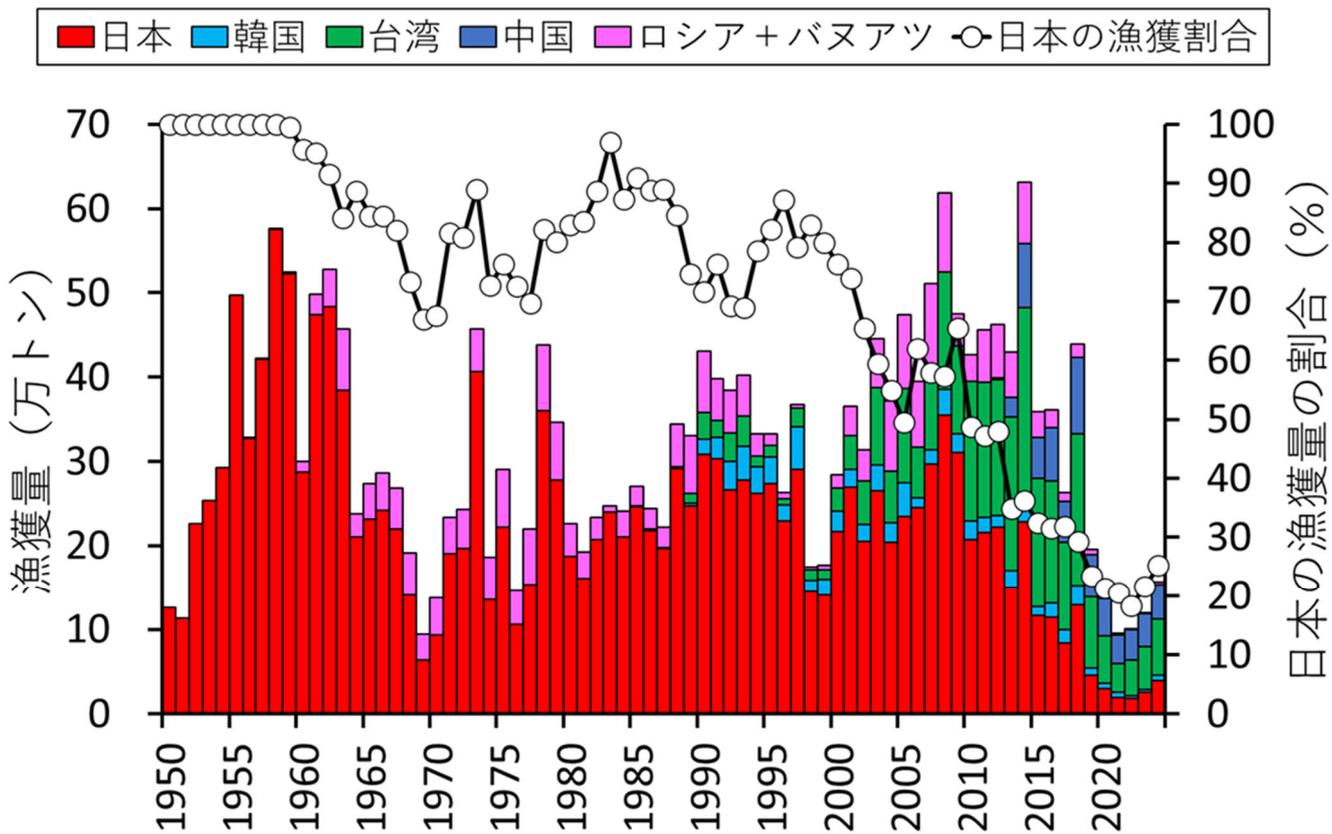
現在、北太平洋のサンマは高度回遊性魚類として北太平洋漁業委員会(NPFC)による資源管理の対象になっている。2019年7月に行われた第5回NPFC年次会合で合意されたサンマの漁獲量上限(2020年漁期(1月1日～12月31日)におけるNPFC条約水域(公海)の漁獲可能量(TAC))は33万トンであったが、2021年2月、2023年3月、2024年4月、および2025年3月に開催された年次会合においてそれぞれ削減された結果、2025年における公海のTACは12.15万トンと定められた。2024年12月に行われたNPFCサンマ小科学委員会では、2023年までの漁獲量、2023年までの日本、中国、韓国、台湾およびロシア漁船の標準化CPUE、および2024年までのサンマ資源量直接推定調査から推定された資源量指数のデータを用いてサンマの資源評価が行われた。その結果、資源量は2000年代中頃以降に減少し、2020年以降はわずかに増加しながらも低水準を維持しており、直近2022年～2024年の資源量はMSY水準の34.5%と評価された。



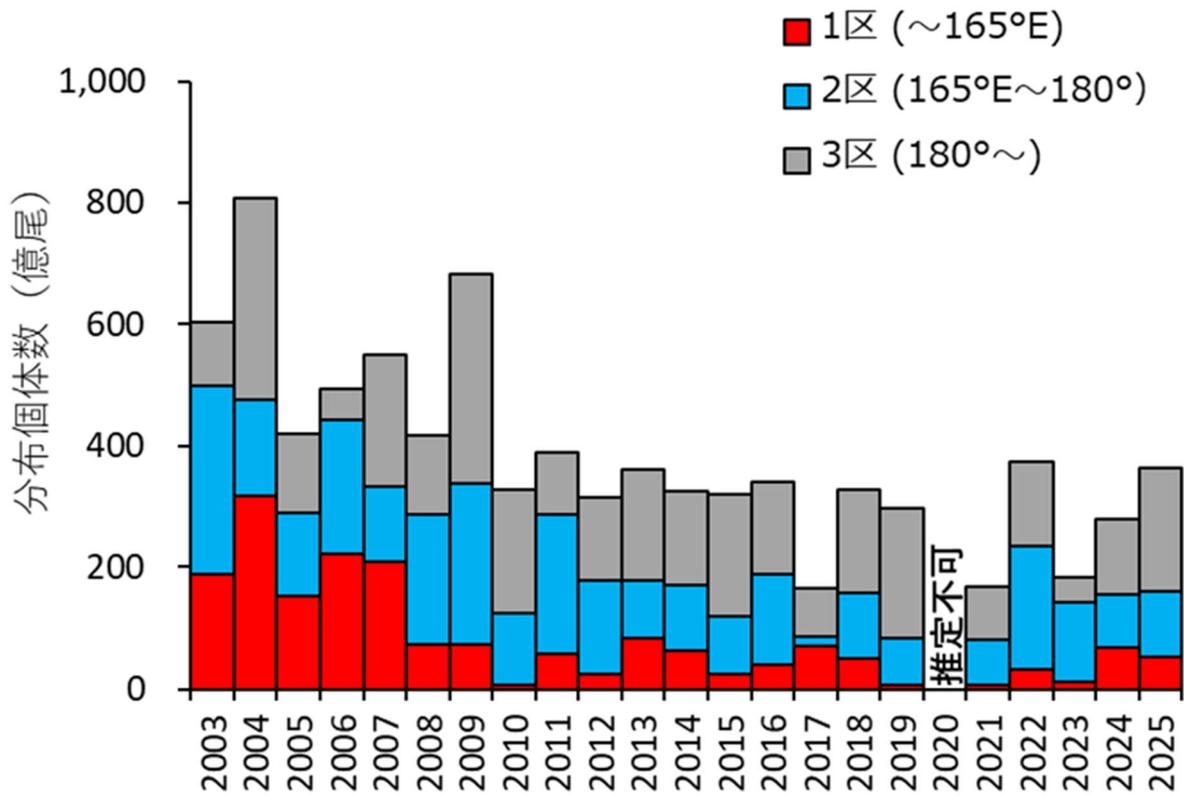
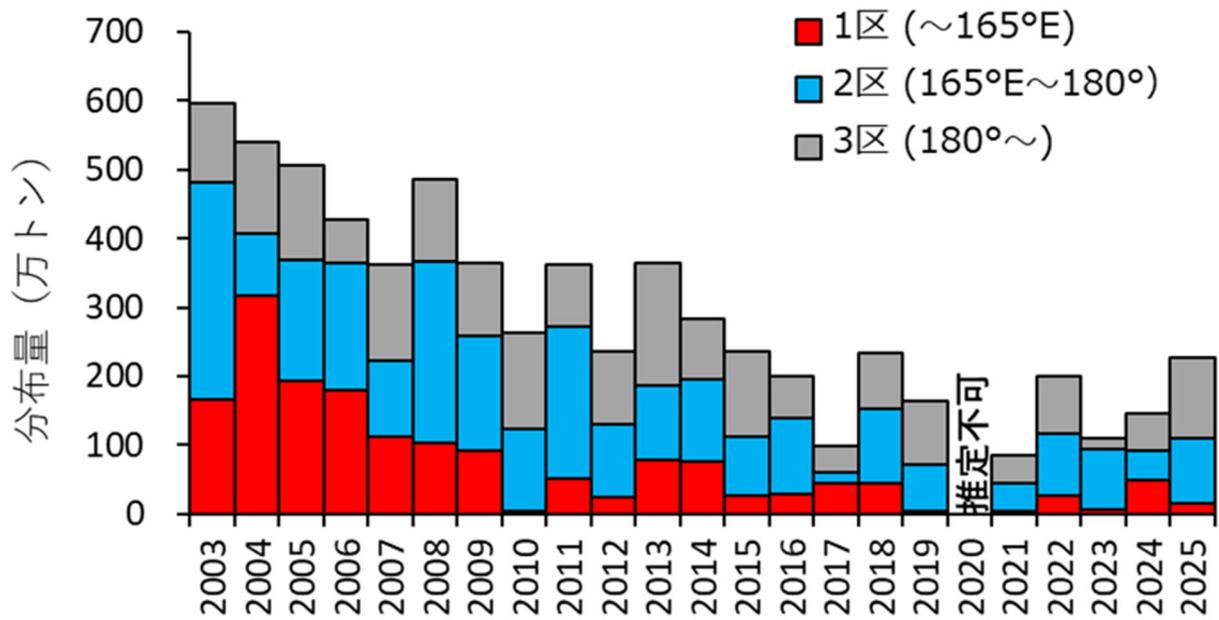
補足図 1-1. サンマの分布域(索餌場と産卵・生育場) 主漁場位置と、例年の調査海域。主に調査時に東経 155 度~180 度に分布する群れが、漁期にかけて日本近海に来遊し漁場を形成する。



補足図 1-2. 月別のサンマの漁場。海洋環境や 6 月~7 月のサンマの分布の変化に伴い、近年漁場が沖合に移動している。



補足図 1-3. サンマ漁獲量の推移（1950 年～2024 年）と日本の漁獲量割合。日本の漁獲量は海面漁業生産統計調査（https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/index.html，2025 年 7 月 9 日）、外国の漁獲量は NPFC の資料（<https://www.npfc.int/statistics>，2025 年 7 月 9 日）を基に作成。NPFC Data Sharing and Data Security Protocol（<https://www.npfc.int/npfc-data-sharing-and-data-security-protocol>）に基づき、漁船数が 3 隻未満のメンバーは合算して表記した。



補足図 1-4. サンマ資源量直接推定調査で推定された 2003 年~2025 年の海区別のサンマ分布量。上は重量ベース、下は個体数ベースによるサンマ推定分布量。

補足表 1-1. サンマ漁獲量の推移（1995 年～2024 年）。日本の漁獲量は海面漁業生産統計調査（https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/index.html, 2025 年 7 月 9 日）、日本以外による漁獲量は NPFC の資料（<https://www.npfc.int/statistics>, 2025 年 7 月 9 日）を基に作成。NPFC Data Sharing and Data Security Protocol（<https://www.npfc.int/npfc-data-sharing-and-data-security-protocol>）に基づき、漁船数が 3 隻未満のメンバーは合算して表記した。

	日本	台湾	中国	韓国	ロシア+ バヌアツ	合計
1995	273,510	13,772	0	31,321	14,283	332,886
1996	229,227	8,236	0	18,681	6,684	262,828
1997	290,812	21,887	0	50,227	4,493	367,419
1998	144,983	12,794	0	13,922	3,057	174,756
1999	141,011	12,541	0	18,138	4,576	176,266
2000	216,471	27,868	0	24,457	14,827	283,623
2001	269,797	39,750	0	20,869	34,616	365,032
2002	205,282	51,283	0	20,088	36,602	313,255
2003	264,804	91,515	0	31,219	57,646	445,184
2004	204,371	60,832	0	22,943	83,735	371,881
2005	234,451	111,491	0	40,509	87,602	474,054
2006	244,586	60,578	0	12,009	77,691	394,864
2007	296,521	87,277	0	16,976	110,692	511,466
2008	354,727	139,514	0	30,212	93,866	618,319
2009	310,744	104,219	0	22,001	37,693	474,657
2010	207,488	165,692	0	21,360	31,686	426,226
2011	215,353	160,532	0	18,068	62,064	456,017
2012	221,470	161,514	2,014	13,961	63,105	462,064
2013	149,853	182,619	23,191	20,055	53,942	429,660
2014	228,647	229,937	76,129	23,431	73,169	631,313
2015	116,243	152,271	48,503	11,204	30,663	358,883
2016	113,828	146,025	63,016	16,828	21,954	361,650
2017	83,803	104,405	48,458	15,353	10,752	262,771
2018	128,929	180,466	90,365	23,702	16,015	439,477
2019	45,778	83,941	51,404	8,375	5,867	195,365
2020	29,675	56,662	44,006	5,993	2,700	139,036
2021	19,513	34,043	33,511	5,993	1,270	94,330
2022	18,384	42,177	35,477	3,438	929	100,405
2023	25,753	50,268	39,252	3,107	1,108	119,488
2024	39,300	67,280	40,504	5,866	2,407	155,357

補足表 1-2. サンマ資源量直接推定調査で推定された 2003 年～2025 年の海区分サンマ推定分布量。上は重量ベース、下は個体数ベースによるサンマ推定分布量。なお、海区分け計算手法の見直しなどに伴い、昨年予報で公表した数値から一部軽微な修正を加えた。

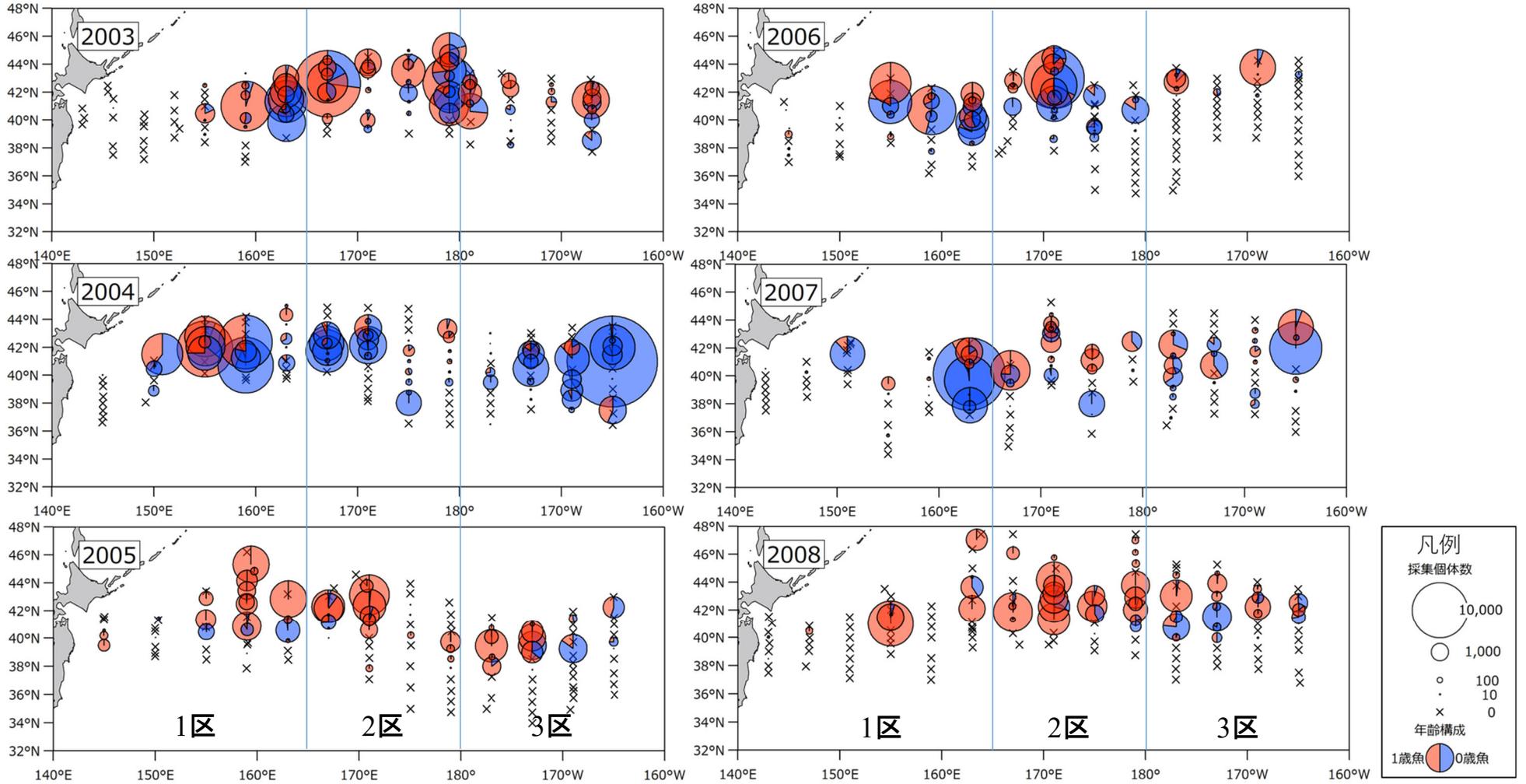
推定分布量(重量、万トン)

年	1区 (~165°E)	2区 (165°E~180°)	3区 (180°~)	調査海区全体
2003	166.1	316.0	114.8	597.0
2004	317.0	89.4	133.0	539.4
2005	193.4	174.9	137.9	506.1
2006	178.9	185.5	62.4	426.8
2007	112.3	110.6	138.6	361.5
2008	103.5	264.3	119.2	487.0
2009	92.1	166.9	105.1	364.1
2010	5.0	118.5	139.6	263.1
2011	52.1	219.6	90.6	362.3
2012	24.0	106.8	104.7	235.5
2013	78.9	107.7	178.9	365.4
2014	76.6	119.9	85.9	282.4
2015	25.8	87.1	122.9	235.7
2016	29.1	109.4	61.2	199.7
2017	44.6	15.3	37.8	97.7
2018	44.9	108.5	81.2	234.6
2019	4.5	67.6	92.5	164.6
2020		調査点が少ないため算出できず		
2021	4.0	41.3	39.1	84.5
2022	27.7	89.9	81.6	199.3
2023	6.8	87.0	15.5	109.2
2024	48.7	43.5	53.2	145.4
2025	16.0	93.9	116.8	226.7

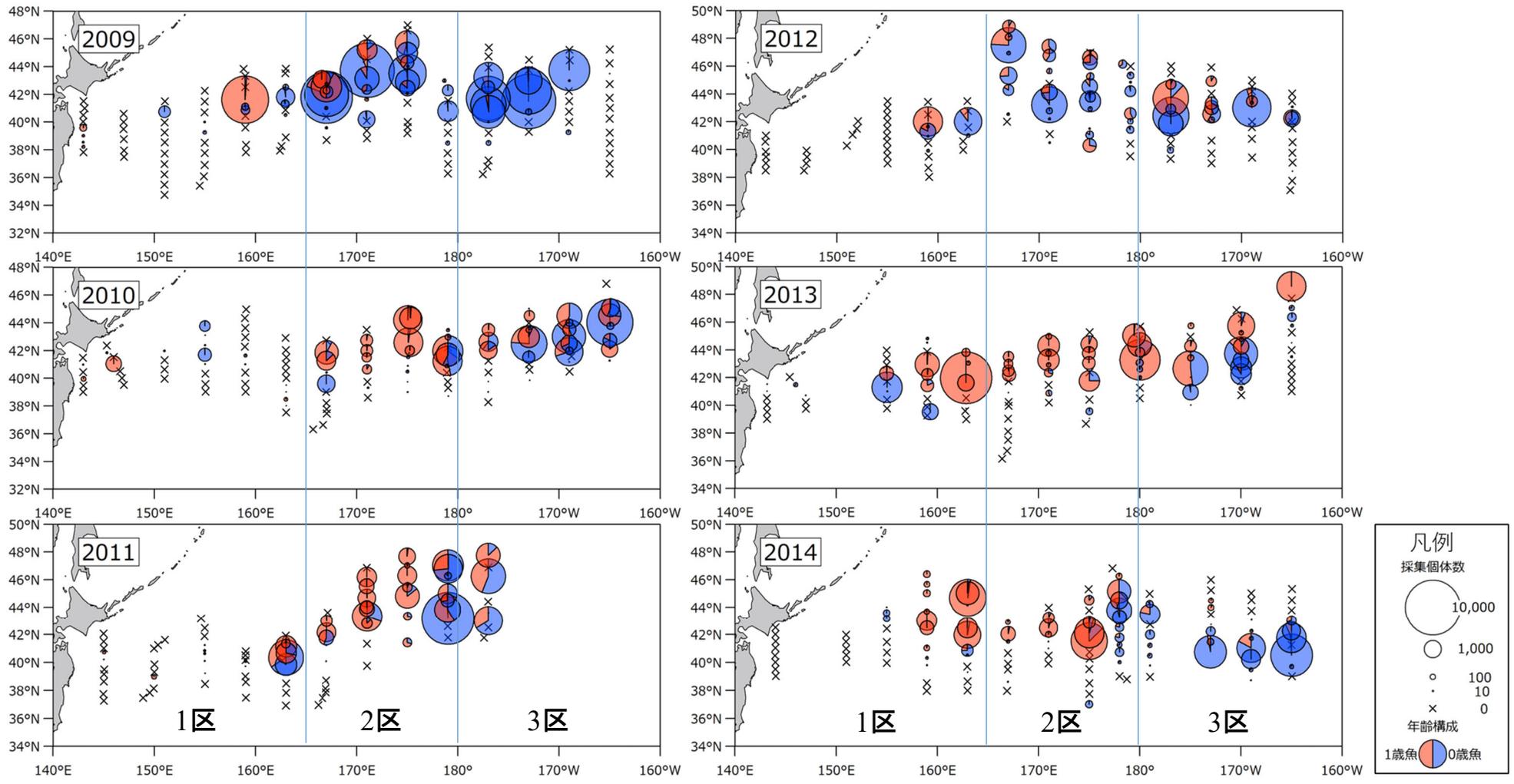
推定分布量(個体数、億尾)

年	1区 (~165°E)	2区 (165°E~180°)	3区 (180°~)	調査海区全体
2003	188.3	310.6	105.4	604.3
2004	317.7	158.3	331.7	807.6
2005	152.2	138.3	129.8	420.3
2006	220.5	222.0	52.5	495.0
2007	207.6	125.0	217.5	550.1
2008	73.9	212.2	130.5	416.6
2009	73.7	263.3	345.3	682.2
2010	7.7	117.1	202.8	327.6
2011	57.8	229.2	102.5	389.4
2012	24.7	152.5	137.4	314.6
2013	82.9	95.5	183.6	362.0
2014	61.9	107.9	155.3	325.0
2015	23.6	95.0	201.9	320.5
2016	40.6	146.8	153.4	340.7
2017	69.5	17.4	77.6	164.5
2018	49.5	107.7	171.5	328.7
2019	5.5	77.9	215.0	298.4
2020		調査点が少ないため算出できず		
2021	5.8	74.9	86.6	167.2
2022	32.6	200.4	141.6	374.6
2023	10.6	131.2	41.6	183.4
2024	67.9	86.4	125.9	280.3
2025	52.3	107.8	204.0	364.0

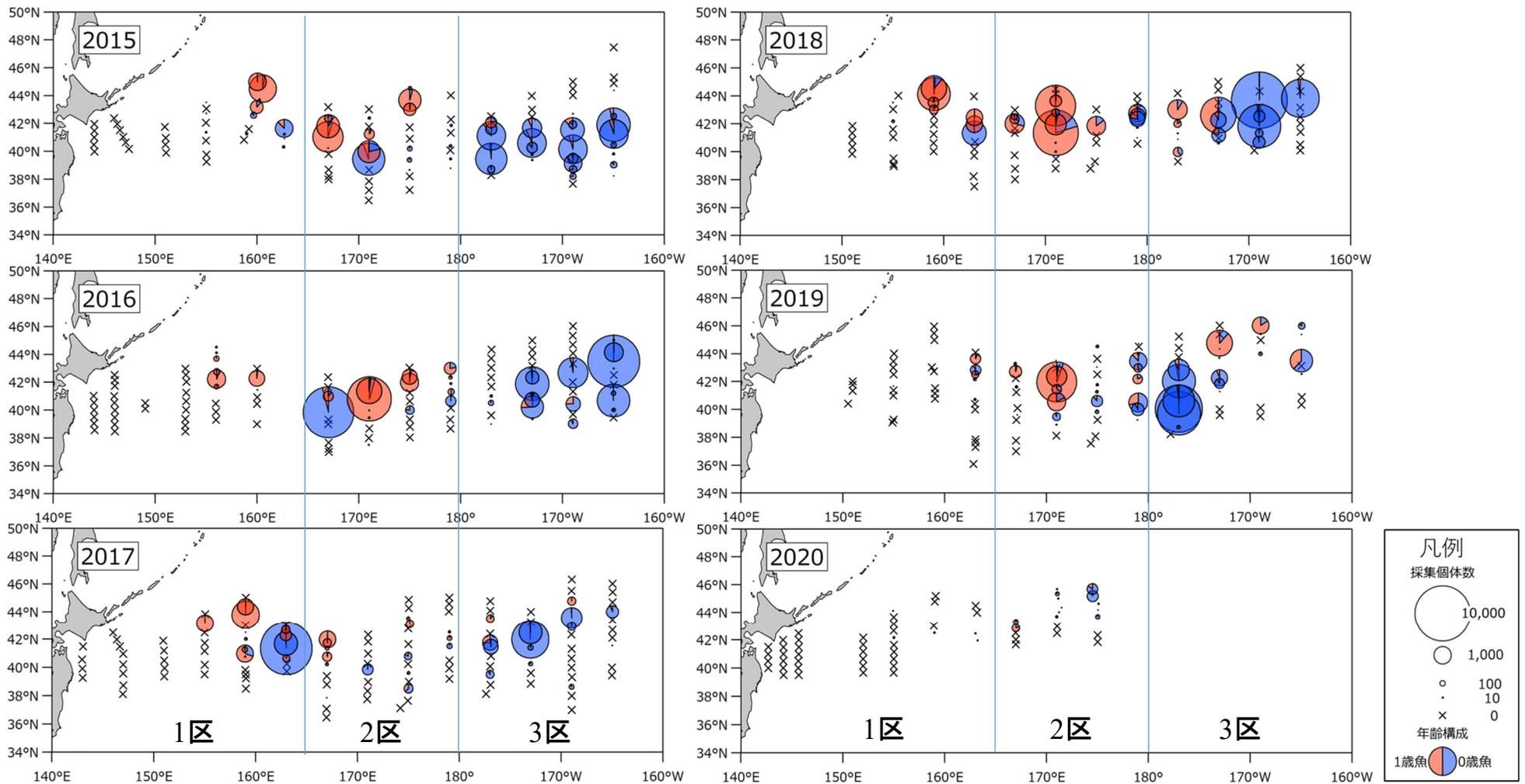
補足資料2



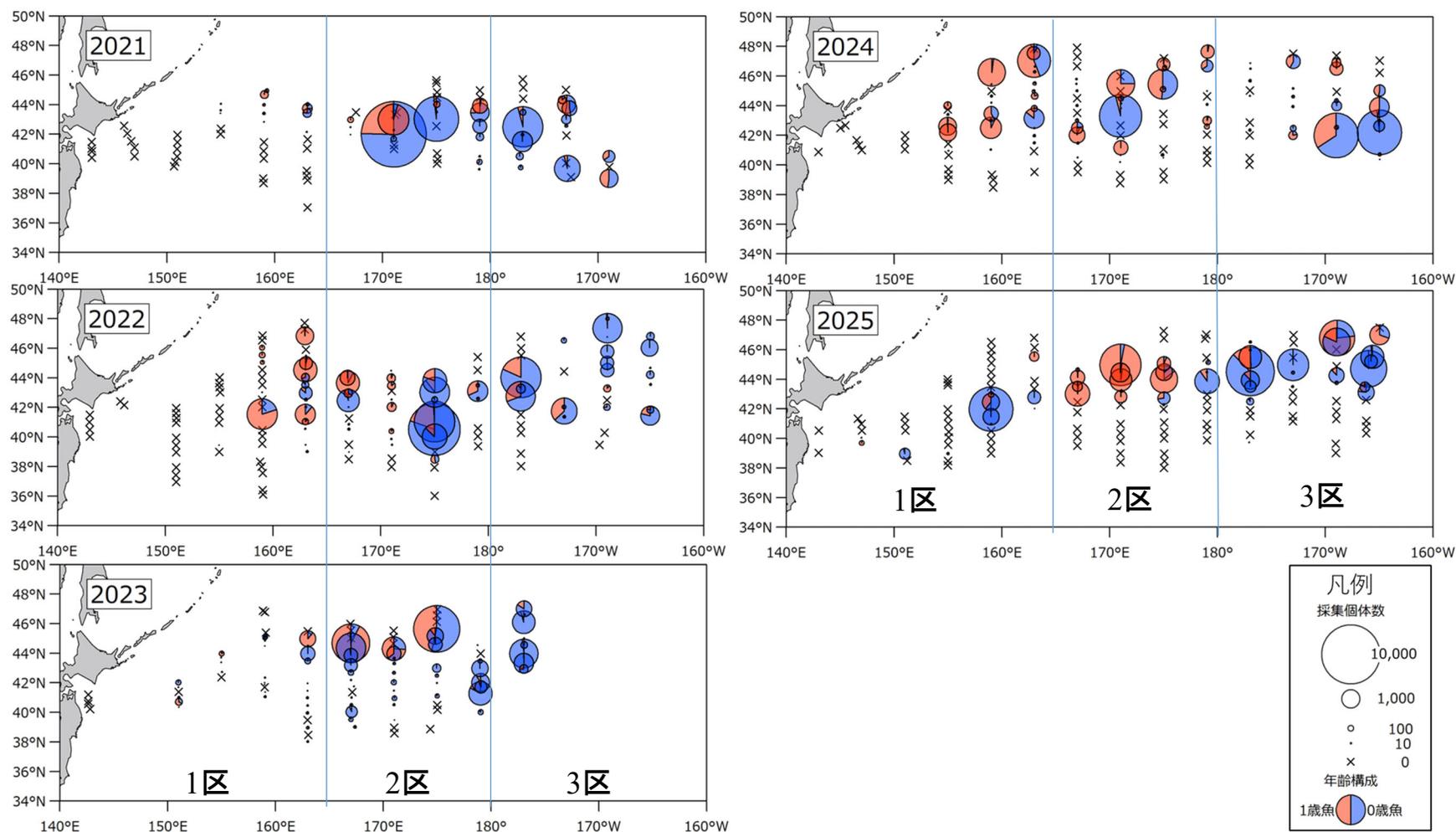
補足図 2-1. サンマ資源量直接推定調査におけるサンマの分布状況（2003 年～2008 年）。円の面積は調査 1 区画あたりの採集個体数を示す。●は 0 歳魚、●は 1 歳魚の割合を示す。



補足図 2-2. サンマ資源量直接推定調査におけるサンマの分布状況 (2009 年~2014 年)。円の面積は調査 1 曳網あたりの採集個体数を示す。●は 0 歳魚、●は 1 歳魚の割合を示す。



補足図 2-3. サンマ資源量直接推定調査におけるサンマの分布状況（2015 年～2020 年）。円の面積は調査 1 曳網あたりの採集個体数を示す。●は 0 歳魚、●は 1 歳魚の割合を示す。



補足図 2-4. サンマ資源量直接推定調査におけるサンマの分布状況（2021 年～2025 年）。円の面積は調査 1 曳網あたりの採集個体数を示す。●は 0 歳魚、●は 1 歳魚の割合を示す。